

【8】阿波に根付いた人形浄瑠璃

阿波人形浄瑠璃は、どのように徳島の人々の暮らしに根付いていったのだろうか、具体的に例示し、知識を深めよう。



『傾城阿波の鳴門』順礼歌の段より



太夫(左)と三味線



人形遣い



天狗屋久吉

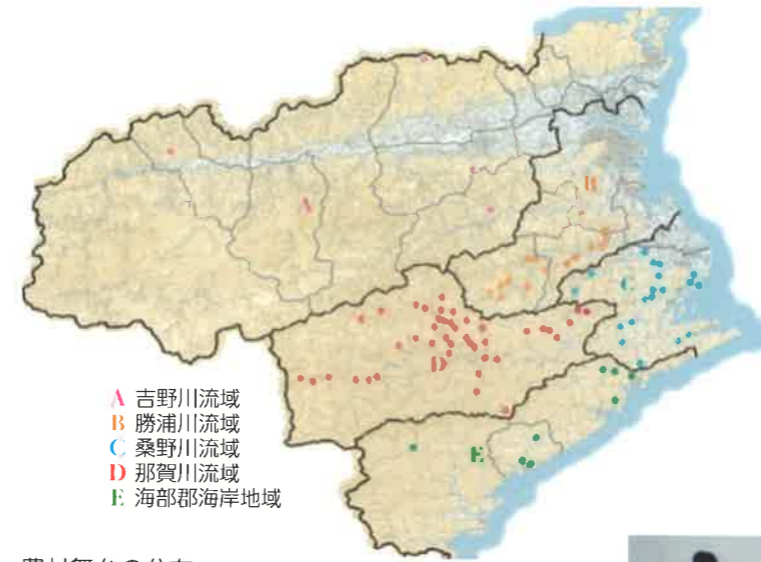
人形浄瑠璃の歴史

人形浄瑠璃は、太夫、三味線、人形遣いが一体となって演じる芸能です。低く大きな音が出る太棹三味線の伴奏に合わせて、太夫は物語を語ります。人形遣いは基本的に一体の人形を三人で操ります。「三人遣い」。他地方では一人遣いもあります。

京都・大坂※(明治以降「大阪」と表記)を中心に太夫と三味線だけの演奏で語られていた「浄瑠璃」は、江戸時代の初めに西宮神社(兵庫県)の「人形遣い」と一緒に、人形浄瑠璃として発展しました。大坂では、竹本義太夫の語りが人気となり、浄瑠璃の語りは「義太夫節」と呼ばれるようになります。やがて、1703(元禄16)年に近松門左衛門の『曾根崎心中』が上演され大成功すると、人形浄瑠璃は全国に広まりました。明治時代に入ると、植村文楽軒が「文楽座」という人形座をつくります。これが現在の「文楽」という人形浄瑠璃の代名詞へとつながっていきます。

阿波人形浄瑠璃の特徴

西宮神社の人形遣いの多くは淡路島の人たちでした。当時の淡路島は徳島藩の領地であったため、歴代藩主に保護された淡路の人形座は、徳島城下で多くの興行を行いました。そのため、人形



農村舞台の分布
(2013現在・NPO法人
阿波農村舞台の会提供)



農村舞台
(国指定重要有形民俗文化財・犬飼(徳島市八多町)の舞台)



阿波木偶人形の頭



ふすまからくり(犬飼の舞台)

浄瑠璃は人々の娯楽として徳島に根付いていきました。小屋掛けの仮設舞台や、常設の農村舞台で盛んに公演が行われ、明治時代には県内に70以上の人形座がありました。徳島の人形浄瑠璃は、屋外で演じられることが多かったため、人形師の天狗屋久吉(1858~1943年)は人形の頭を大きくし、目や鼻もはっきり彫りました。人形遣いは人形の動きがよく見えるように、人形を大きく傾けて演じ、振りも大きくしました。このような特徴を持つ徳島の人形浄瑠璃を「阿波人形浄瑠璃」と呼びます。

阿波人形浄瑠璃の現在

阿波人形浄瑠璃は、映画など新たな娯楽の登場や戦争の影響で急速に衰えましたが、1946(昭和21)年に「阿波人形浄瑠璃振興会」が結成されたことなどをきっかけに復活し、1999(平成11)年に国の重要無形民俗文化財に指定されています。復活した農村舞台だけでなく、阿波十郎兵衛屋敷、部活動や伝承教室、国民文化祭などさまざまな場で阿波人形浄瑠璃は演じられています。また、徳島は多くの人形師も輩出していることでも、全国的に知られています。現在でも全国各地から人形の注文や修繕の依頼が来ており、伝統と技が受けつがれています。

1971年の調査では、全国で確認された人形芝居関係の農村舞台は216棟あり、その96%にあたる208棟が徳島県内にあったことが報告されています。



小屋掛け=仮設の舞台
(徳島中央公園)



伝承教室の様子